



Gold Link Corporation

GOLD FOURSEASONS REPORT

発行日 令和5年7月25日

目次：

今年第1四半期の世界金需要 1

金価格の変動要因と見通し 6

2023年第1四半期の世界金需要

ワールド・ゴールド・カウンシル（WGC）が「世界金需要報告」を発表しました。

○概要

LBMA金価格は当四半期の平均で1,890米ドル/オンスとなり、前年同期比で小幅上昇した。

価格は前四半期の平均を10%以上上回り、過去最高を記録した20年第3四半期にほぼ並んだ。

中国では、コロナ禍後の最初の四半期に、自由な個人消費の力強い救済ラリーが見られた。国内経済の回復と健全な所得増加が国内消費を再び活性化させ、人目を引く金価格のパフォーマンスが投資意欲に拍車をかけた。

インド国内の金価格が急ブレーキをかけたため、インドの需要は急減し

た。記録的な値と不安定な国内金価格は、当四半期の投資と宝飾品の消費を抑制した。

2023年の見通しでは投資が大半を占めるでしょう。今年も投資については健全な上昇傾向が続くと見られるが、製造（宝飾品とテクノロジー）については、より緩やかな見通しである。

2022年の記録を下回るものの、中央銀行による買い入れはさらに堅調に推移すると予想される。鉱山生産とリサイクルはともに緩やかな成長が見込まれる。

第1四半期の金需要はまちまち

中央銀行による買い入れの勢いが続き、中国の消費者需要が復活した一方で、ETFのマイナス寄与やインドの低迷が対照的だった。

	Q1.22	Q2.22	Q3.22	Q4.22	Q1.23	前年同期比
宝飾品計(消費+在庫)	516.4	492.3	582.3	601.3	508.6	-2%
エレクトロニクス	66.2	64.6	63.2	58.0	56.0	-15%
その他	12.0	11.3	11.3	11.9	11.6	-3%
歯科	2.7	2.6	2.5	2.4	2.4	-12%
テクノロジー小計	81.0	78.5	77.0	72.3	70.0	-13%
金塊退蔵	183.6	172.8	225.6	222.4	181.9	-1%
公的金貨	84.6	70.8	89.4	89.0	96.5	+14%
メダル類	19.5	17.6	33.0	28.9	24.1	+23%
金地金・金貨小計	287.7	261.2	348.0	340.3	302.4	+5%
ETF・関連商品	270.7	-47.4	-244.1	-89.6	-28.7	—
投資合計	558.4	213.8	103.9	250.6	273.7	-51%
中央銀行金購入	82.7	158.6	458.6	378.6	228.4	+176%
需要合計	1,238.5	943.2	1,221.8	1,302.8	1,080.8	-13%

今年第1四半期の世界金需要

第1四半期の金需要（店頭を除く）は前年同期比13%減の1,081トン。OTCを含む金需要総量は、前年同期比1%増の1,174トンであった。これは、先物市場における投資家のポジショニングと一致するOTC投資の回復が、一部の分野での低迷を相殺したためである。

中央銀行からの需要は当四半期に大きく伸びた。中央銀行の公的部門は、引き続き金の購入に熱心であり、世界の金準備高を228トン増加させた。

地金・コインの投資残高は、前年同期比5%増の302トンとなり、地域による大きなばらつきが見られた。対照的に、ETFの純需要はマイナス29トンと小幅ながら、前年同期比で減少した。

世界の宝飾品消費量はほぼ横ばいの478トン。宝飾品の製造量が消費量を上回ったため、世界の在庫は30トン強増加した。

○展望

前年同月比の主な変動は投資である。

世界的な金ETFの需要は、上昇を見るための新たな材料が必要だ。欧州の軟調な動きにより、ETFの価格は若干下落した。しかし、世界的には、需要は堅調であり、景気後退リスクと金利上昇の逆風が弱まることから、ETFは大幅な上昇ポテンシャルを維持すると予想される。

米国、東南アジア、中東の需要が第1四半期の顕著な欧州需要の鈍化を上回ったため、金地金とコインの需要は好調なペースを維持しそうだ。

宝飾品需要は、中国の再開に刺激されて底堅

く推移している。しかし、世界的な成長鈍化が今後の需要に影響を与えそうである。

各中央銀行は今期を前向きにスタートさせ、2022年の記録的な水準には届かないとはいえ、通年の予測を上方修正した。

供給は、記録的な価格に近い水準だがリサイクル市場が活発ではなく、これは、地政学的リスクプレミアムが家計や個人の金保有を促していることを示している。

☆ETF

欧米の需要はまちまちで、米国の強さは欧州の大幅な弱さによって相殺された。

- ヨーロッパの景気後退懸念が支配的な原動力となっている可能性が高い。
- 投資のバトンは、金地金やコインの需要からETFやOTCの需要へと、当初の想定していたよりもゆっくりと受け渡されている。
- 北米の金ETFは、ここ数カ月間、一時的な資金流入が見られたが、米国の銀行破綻に伴う3月の急騰により、今四半期はプラス圏に浮上した。

金利の上限がより確実視される中、四半期ごとのネット・フローは今後プラスに転じると予想される。また、成長鈍化により株式バリュエーションが過大評価となり、地政学的リスクは2022年当時と同様、いやそれ以上に高まったままである。しかし、大規模な資金流入のきっかけは依然としてつかめず、欧州ETFの低迷は世界的な数字の重荷となり続ける可能性がある。期待される先進国市場の景気後退の警告は引き続き上値を支える

■主要国需要

	2023年第1四半期			前年同期比		
	宝飾品	投資	合計	宝飾品	投資	合計
インド	78.0	34.4	112.5	-17%	-17%	-17%
中国	208.0	68.0	276.0	+14%	+31%	+18%
中東	45.1	28.8	73.9	-5%	+46%	+10%
トルコ	9.0	50.5	59.5	+20%	+300%	+237%
日本	3.0	-2.6	0.4	3%	-	-
米国	25.7	32.3	58.0	-4%	+4%	+1%
欧州	11.0	38.1	49.1	0%	-53%	-47%

注1：単位はトン

注2：前年同期比は22年第1四半期と23年第1四半期との比較

注3：中国の需要は台湾・香港を含んだ数値。

■供給

	Q1. 22	Q2. 22	Q3. 22	Q4. 22	Q1. 23	前年同期比
鉱山生産	843.1	894.4	956.3	955.7	856.0	+2%
生産者ヘッジ	25.9	2.3	-25.9	-13.0	8.1	-69%
鉱山生産小計	869.0	896.7	930.4	942.7	864.1	-0.5%
リサイクル	296.2	285.3	268.6	290.5	310.4	+5%
供給合計	1,165.1	1,182.0	1,198.9	1,233.2	1,174.4	+1%

注1：単位はトン

注2：上記のQは四半期

注3：前年同期比はQ1. 22とQ1. 23との比較

今年第1四半期の世界金需要

が、景気後退そのものが実現するのは年後半になる可能性があり、ETFの資金流入は少し先送りされるかもしれない。

☆地金&金貨

金ETFの需要は先送りされ期待外れだったものの、先物のネットロングポジションが約150トン増加したことを反映して、第1四半期の店頭需要はプラスに転じ、世界の金地金とコインの需要も驚くべき回復力を見せた。中国の第1四半期の金地金・コイン需要は好調で、この好調は今後も続くと思われる。歴史的に見て、中国の信用衝動（経済における新たな信用創造を示す指標）は、以前は金地金・コイン需要と密接に関連していた。ロックダウン中のデカップリング、過去1年半の大半をマイナス圏で過ごした後、衝動買いは最近プラスに転じた。加えて、公的な購入が国内の金に対するセンチメントにプラスに働いた。これは、この分野の需要にとって良い兆しとなりそうだ。

第1四半期のインドの金地金・コインの需要は、現地価格が記録的な水準に達したため低調だった。

一方、欧州では、12月にドイツ国債の実質金利がプラスに転じ、ユーロ金価格が高騰したため、金の積み増しは抑制された。

今後のリスクを考慮すると、欧州の低迷は一時的

なものであると考えている。世界的な数字の強さとOTC投資の回復を考慮し、通年の金地金・コイン需要と総投資額は伸びる。

☆宝飾品

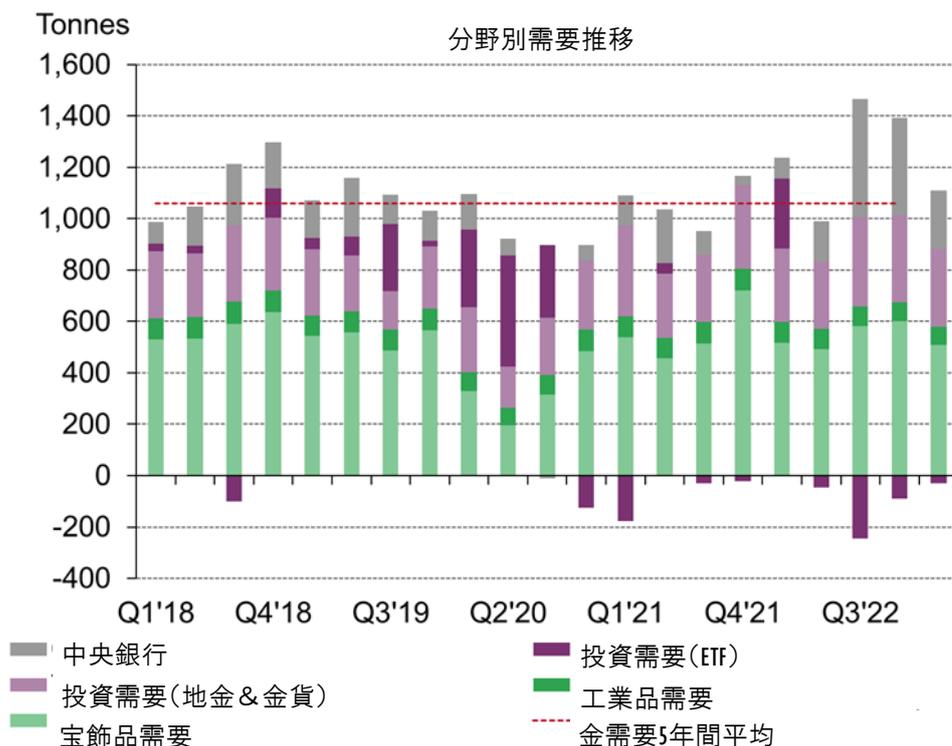
中国は予想通りの反応を示した。第1四半期の宝飾品需要は好調で、今後もその恩恵は続くだろう。しかし、コロナ禍後の欧州のように、再開が定着するにつれ、消費が他へ向かう可能性がある。外国人旅行客は徐々にではあるが戻り始めており、他の要因も含めて今後数四半期にわたって宝飾品需要を食い潰す可能性がある。

第1四半期の欧米の宝飾品需要は前四半期と同水準だが、成長減速の懸念から下振れリスクがある。

インドの宝飾品需要は、今年いっぱいには金地金やコインの需要と同様の逆風に直面すると予想される。成長率とインフレの鈍化に加え、国内物価の高騰が重なって、消費者が価格上昇に適応し始めた兆候は見られるものの、需要は低迷を続けるだろう。

○第1四半期の投資

金ETFの保有量がわずかに減少したのに対し、金地金やコインの買いが活発であったため、金投資需要の傾向が分かれた。



今年第1四半期の世界金需要

- 投資需要は274トンで前期比9%増、前年同期比51%減
- 世界の金ETFの保有高は第1四半期にわずかに減少（-29t）、1月と2月の流出は3月の流入で部分的に反転
- 世界の金地金・コイン投資量は3四半期連続で300トンを超え、これは2013年以来のことである。

第1四半期の投資需要は前四半期と同様のパターンとなった。

3月には、銀行業界に深刻な亀裂が生じ、金価格が上昇したことから、機関投資家層のセンチメントは著しくポジティブに転じた。毎月のETFへの資金流入と同様に、3月にはCOMEXのネットロングも顕著に回復し、四半期を終えて622トンと過去10ヶ月で最高となった。

☆ETF

第1四半期は、小幅ながら、四半期連続で金ETFからの世界的な純流出となり、これまでと同様、ETFの需要は地域によって様々であった。

資金流出の大半は欧州上場商品によるもので、アジアのファンドは軽度の流出にとどまった。対照的に、北米上場ETFとその他の地域上場ETFには第1四半期に資金流入が見られた。

北米の上場ファンドは第1四半期に10トンを追加し、AUMで8億2900万米ドルの純流入となった。同地域の運用は米ドルと金利期待の動向に敏感で、1月と3月に資金が流入したが、2月には資金が流出した。3月の銀行ミニ危機は、金価格の上昇と同様、モメンタム買いを促進し、投資を促す決定的な要因となった。

3月にプラスの需要があったにもかかわらず、欧州に上場している金ETFは、第1四半期に40トンの純流出を記録した。英国とドイツに上場しているファンドが流出を主導した。域内のセンチメントは、域内全域で大幅な利上げが続いていることが背景にあるようだ。3月の回復は、株式市場の低迷に対応したものであった。

中国の旧正月は金投資への旺盛な需要を生み出し、特に現地の金価格が堅調であったことから、株式、債券、コモディティを含む他の国内

資産と比較してアウトパフォームした。PBoC（中国人民銀行＝中国の中央銀行のこと）によって報告された公的金保有量の増加は、金投資への関心をさらに促したようである。世界的な地政学的緊張が高まったからである。さらに、消費者の高い貯蓄傾向も、歴史的に金が完全な価値貯蔵とみなされてきたことから、彼らの関心を高めた可能性がある。今後、地政学的リスクが高まる中、安全資産としての金の役割に関心が高まる可能性があるため、国内金需要の伝統的な低迷期である第2四半期は、通常よりも強い買いが入る可能性がある。消費者の貯蓄傾向も記録的な水準にあり、ここ数四半期の金需要を支えている。

☆金地金とコイン

投資家は第1四半期に302トンの金地金とコインを購入し、5年間の平均を14%上回り、金額にして184億米ドルに相当した。一部の市場では記録的な水準に達した堅調な金価格が、勢いのある買いを促した。高インフレの持続、地政学的リスク、銀行危機の伝染に対する懸念が需要をさらに喚起した。しかし、金価格の高騰が利益確定を促し、いくつかの主要市場で急落が見られたため、需要は前四半期の水準には及ばなかった。

【中国】

中国では第1四半期の金地金・コイン投資が急増。中国のコロナ禍からの脱却と人目を引く金価格の上昇を主な要因として、需要は合計66トンとなり、前年同期比34%増、前四半期比7%増となった。

【インド】

第1四半期の記録的な高値と不安定な現地金価格は、金投資需要の主要な原動力であったが、34トンと比較的低調であった。その結果、前年同期比では17%の減少、前四半期比では40%の急減となった。比較するとより長期的なトレンドでは、需要は5年間の四半期平均を14%下回った。現地の金価格の上昇の速さと規模は、新規の買いを抑制し、多くの人々に利益確定を促した。さらに、利幅の低い宝飾品に比べ、金投資商品に対する小売業者の販促活動は集中した。

今年第1四半期の世界金需要

後者についてはインド経済の勢いは依然として健全であり、RBIは利上げサイクルを一時停止した。このような背景から、小売投資の見通しは現地の金価格に大きく左右される。このような極端な高値水準で、さらなるボラティリティが発生することは、引き続き投資意欲を減退させる要因となるだろう。金地金やコインの投資家にとって、これ以上の値上がりは利益確定売りを促す可能性が高い。

○中央銀行

中央銀行の需要は2023年に向けて記録的なスタートを切った。

- 1四半期の中央銀行需要は228トンに達し、2013年に記録した第1四半期の記録を34%上回った。
- これは2022年の年間需要1,078トンに続くものである。
- 当四半期に買いが入ったのは、新興市場および先進市場の銀行であった。

中央銀行の金購入は、目覚ましいスタートを切った。第1四半期の需要は228トンに達した。これは、過去2四半期に見られた数字よりは低いものの、それでも過去最強の第1四半期である。

これは、昨年の記録的な需要のペースに続くものであることを考えれば、なおさら印象的である。第1四半期の4四半期累計は1,224トンと、ここ数四半期の大規模な買い越しを受けて大幅に跳ね上がった。2022年第3四半期と第4四半期の数字と同様、今四半期のデータには未報告の活動がかなり含まれている。

第1四半期に報告された購入量の大半は4つの中央銀行によるものであった。シンガポール金融管理局（MAS）の金準備高は69トン増加し、2021年6月以来初めて増加したことから、第1四半期の金購入は新興市場の中央銀行だけのものではなかったことが確認された。MASの金準備は現在222トンで、2022年末より45%増加している。

中国人民銀行は、金準備高が58トン増加したことを明らかにした。2022年11月に購入報告を再開して以来、PBoCは金準備高を120トン増や

し、2068トン（報告されている金準備高全体の4%）に引き上げている。

トルコはこの四半期に再び金を大量に購入した。1月と2月の合計45トンの購入は、2021年11月以来となる3月の売却によって相殺された。金地金の輸入が一時的に一部禁止された後、15トンの金が国内市場に売却された。

インド準備銀行も第1四半期に7トンを追加し、金準備を795トンに増加させたほか、チェコ共和国（2トン）とフィリピン（1トン）も顕著な買い手となった。

第1四半期の重要な変化は、ロシア中央銀行による金準備の報告再開であり、2022年1月末から現在までのデータを埋め戻した。第1四半期のロシアの公式金準備は6トン減少し、2,327トン（準備全体の25%）となった。しかし、この減少（おそらく硬貨の鑄造に関連したもの）にもかかわらず、ロシアは金準備高を増加させている。同国の金準備高は、昨年報告停止時より28トン増加した。

これと比較すると、売りはまたはるかに控えめであった。ウズベキスタン中央銀行（-15トン）とカザフスタン国立銀行（-20トン）が、この四半期の最大の金の売り手であった。カンボジア（-10トン）、アラブ首長国連邦（-1トン）、タジキスタン（-1トン）が他の顕著な売り手であった。クロアチアは1月に2トンの金保有量の減少を報告したが、これはユーロ圏に加盟する全ての国に義務付けられている欧州中央銀行への移管であり、公的部門の金の世界的な減少を表すものではない。

中央銀行の買い入れは依然として堅調であり、短期的にこの状況が変わることを示すものはほとんどない。そのため、第2四半期に入っても、引き続き購入額が売却額を上回るとの見方だ。しかし、この純購入のペースを判断するのは難しい。急ピッチなスタートが持続する保証はないし、購入・販売ともにサプライズ的な動きがある可能性も否定できない。

金について過去の変動、その要因がよくわかるレポートを紹介します。

2023年7月現在、金価格が急騰しています。

金価格高騰の要因

- ・ 米金利上昇による経済不安
- ・ シリコンバレー銀行の破綻やクレディスイスの不振によるリスクオフ

現在は世界的なインフレにより経済後退が懸念されています。また、2023年3月には大手クレディスイスの経営不振や、アメリカシリコンバレー銀行の破綻など金融機関での不振も続いている状況です。

金は有事の際の金とも呼ばれており、リスクオフの安全資産としても有名です。重なる世界経済の不安定さが露呈する中で、金に資産を移す流れが強まってきたと言えるでしょう。金は2020年のコロナショックで高値（2067ドル/オンス）を更新しましたが、現在は最高値に迫る勢いとなっています。

金のこれまでの価格推移をチャート図を見ながら解説していきます。金価格がこれまでどのような動きを見せてきたのか、またはそれらの変動要因について見ていきましょう。

1980年代：金輸出の自由化とソ連のアフガニスタン侵攻で高騰

1970年～1981年までの価格推移です。



日本で金の取引が活発化したのは、1978年ごろのことになります。金輸出が自由化されたことで、投資対象としても認識されるようになりました。

そして、1980年1月には史上最高値となる1g=6,945円を記録します。

- ・ 1979年2月：イラン革命、第2次石油危機
- ・ 1979年11月：テヘランのアメリカ大使館占拠事件
- ・ 1979年12月：ソ連によるアフガニスタン侵攻
- ・ 1980年：イランとイラクの戦争が本格化

各地で戦争や軍事侵攻が立て続けに起きた時期であったため、資産を金に移す動きが強まってきました。

急激な高騰を見せた金価格は、1980年1月に高値を付けたあとに調整相場を迎え、わずか4カ月間で3,000円以上もの下落を記録します。

1980年～2000年まで：20年以上下落の一途を辿る

1980年に入り高値を更新してきた金価格ですが、2000年代まで20年以上の間で下落します。1983年にOPECが原油価格の大幅な値下げを実施しました。金の価格は原油価格と比例しやすい特徴があり、連動して金の価格を押し下げた形です。現在とは真逆で中央銀行は当時、金を売却しており大

金CFD (米ドル/オンス) , 1週, TVC 1960.71 -0.07 (-0.00%)



きな要因のひとつです。

1998年には1g=865円という史上最低価格を記録しており、現在に至るまでこの安値は更新されていません。

2000年代前半：上昇トレンドへの転換

金CFD (米ドル/オンス) , 1週, TVC 1960.71 -0.07 (-0.00%)



20年以上の長期的な下降トレンドを形成していた金価格ですが、2000年代に入ると上昇トレンドに転換します。

- 2001年：ITバブル崩壊、世界同時多発テロ
- 2003年：イラク戦争
- 2007年：サブプライムローン問題
- 2008年：リーマンショック

上記のような地政学的リスクが影響して、金価格の上昇を後押ししました。特に、2007年のサブプライムローン問題や翌年のリーマンショック時の上昇率は大きいです。世界経済に対する不安が直結して現金や金融資産を金に移す流れが加速したことで、2007年には1980年に付けていた最高値を更新しました。

2010年以降：米経済回復による停滞もコロナショックで最高値更新

2000年代に入り高騰を続けていた金価格ですが、2011年をピークに停滞し始めます。アメリカの経済が回復したことにより、金を投資先として選定する投資家が減った事が要因です。また、急騰を続けていた金を売って利益を確定させる投資家が増えたことも要因と言えるでしょう。2011年～2019年まで長期間での停滞が続きますが、2020年には世界中で新型コロナウィルスが蔓延したことをきっかけに高騰しました。2011年の最高値を更新しており、有事の際の金という言葉も広く浸透するようになっています。



このように、金価格は長い歴史の中で大きな上昇・下落を繰り返してきました。ここでは過去の価格動向から読み取る金（GOLD）の価値が上昇する要因について解説していきます。まずは、下のチャート。ここ20年余りで金の価格が5倍近くに急上昇していることがわかります。



2001年には同時多発テロ、2008年にはリーマンショック、そして2020年にはコロナショックと世界経済を揺るがす事件などが頻繁に起こったことから、第二次世界大戦後の安定した経済から不安定な経済に移行したのが原因です。経済が不安定になれば通貨の価値を保証する国そのものの信用度が落ちるため、投資家の投資先が株式や通貨ではなく、現物である金（GOLD）に向かいます。

それらの理由が金価格上昇につながったのでしょうか。

では、実際に金価格が上昇するとされる要因について見ていきましょう。その要因とされるものは次の通りです。

金 (GOLD) 価格上昇の要因① ドル価値の希薄化

アメリカドルは世界の基軸通貨であり、通貨の中で最も力を持っています。そのドルが力を失った時、金 (GOLD) 価格が上昇する要因になるのです。例えば、今回のコロナショックのような世界経済を揺るがすような有事が起こった際、アメリカの中央銀行であるFRBを中心に世界各国の中央銀行が、経済を良くしようと大量に通貨を供給します。特に世界的な経済危機の場合、主軸通貨でもあるアメリカドルはより大量に供給されます。金は1オンスいくらというような形で取引されているため、ドルが大量に供給されることでドル価値が希薄化します。すると、通貨そのものの価値がなくなってくるため、現物である金の価格が相対的に上昇するのです。金は通貨とは異なり、限りある資源である側面を持つことから、通貨の力が弱まった際に買われます。2022年は、FRBによる金利引き上げが行われたことから世界的なドル高水準となっています。金価格も上げ渋りを見せていますが、その分金の買いも増していることから高値圏で停滞をしている状況です。



金 (GOLD) 価格上昇の要因② 世界的な低金利

金価格上昇の要因2つ目として考えられるのが、世界的な低金利によるものです。金利とは、銀行などに預けておくとして預けておいたお礼として元金の何%という割合で上乗せされるもののことです。つまり、通貨を預けておくだけで資産が少しずつ増えるのです。一昔前までの日本では、銀行にお金を預けておくだけで自然に資産が増える時代がありましたが、現在は金融緩和が行われ、マイナス金利やゼロ金利などで現金を預けておいてもお金が増えない時代になりました。金融緩和がされるときのというのは、経済が悪化しているときです。そうなると先ほど解説した通り、相対的に金 (GOLD) の価値が上昇するため、金価格が上昇します。現在は低金利の脱却が進んでいますが、2023年中に収束する流れが見込まれている国も多く、上昇が期待されているのです。

金 (GOLD) 価格上昇の要因③ 地政学リスク

3つ目が地政学リスクです。



地政学とは、政治的、社会的、軍事的な要因で緊張が高まった時のリスクを指します。

安全資産として知られている金は、世界情勢の不安定さに連動をしやすいです。直近で見ると、2022年2月にはロシアがウクライナに対して軍事進攻をしたことで、一時的に金価

格が上昇しました。世界情勢の緊迫は金に資産を移す投資家が増えることから、一気に上昇する要因となります。

金（GOLD）価格上昇の要因④金生産の減少

4つ目が、金生産の減少です。これは単純に需要と供給のバランスによる価格上昇です。金生産が減少すれば、金そのものが世に出回りにくくなるため、供給に対して需要が上回るため、価格が上昇するのです。

最後に、大手証券会社が公表している金価格今後の予想について紹介していきます。

①M証券の予想

M証券では、2023年中に金が再度上昇し高値挑戦または突破をすると予想しています。過去のインフレ→景気後退の流れでは、金価格が上昇したという背景があります。2023年は景気後退リスクが加速するとの見通しから、安全資産としての金が価値を上げるのではないかと予想です。2022年の下落はあくまでも米ドル高によるものであったことから、利上げが落ちつき米ドル高が抑制されれば、すぐに上昇すると考えていいでしょう。また、利上げの打ち止めと共に各国での経済が悪化すれば、金融市場がリスクオフとなり大きな価格上昇が予想されます。

②R証券の予想

R証券では、金価格相場が最高値の更新を続けると、こちらにもポジティブな予想となっています。M証券と同様に、景気後退リスクが安全資産である金価格を伸ばす要因と予想しています。また、R証券では以下の2点も金価格に良い影響を与えるとの予想です。

- ・各国の中央銀行が有事に備えて金の保有量を増やす
- ・仮に利上げが継続されたとしても、ドル高は抑制される

2020年段階で中央銀行が保有する金は、全体の26%程度です。最大の国はやはりアメリカですが、景気後退やウクライナ・ロシア情勢の悪化に伴い中央銀行の保有する金の量が増加すると考えられます。また、2022年から続く段階的利上げは経済面での不安が大きくなってきていることから、今後も利上げが継続したとしても米ドル高が抑制されるとの見方です。利上げ継続、打ち止めのどちらでも米ドルが売りに転じる可能性が高いことから、相対的に金価格が上昇すると考えられます。2020年に金はコロナショックの影響で約2030ドルまで上昇したので、今後は2030ドルかそれ以上の価格で取引されるとの見方です。

③T社の予想

T社では、今後の金を以下のような見通しを立てています。

「もし今後FRB高官から「状況次第では利下げを検討する」といったコメントが出てくるようになれば、それこそ一気に2000ドルの大台を上抜けてさらに値を伸ばす展開になることも期待できそうだ。その意味で、今の金は、買いの絶好のチャンスになると考えてよさそうだ。」

2023年もアメリカでは利上げが進んでいますが、インフレの収束によりいずれ利下げが行われるのは間違いなしとしています。その結果、金価格の後押しとなり、上昇するとの見通しです。高値更新も2023年中にあり得るとして、高い期待をしていることが分かります。

各社の予想まとめ：米経済懸念やドル売り圧力で上昇の見通し

M証券 米経済懸念から安全資産である金価格の上昇が期待できる

R証券 米ドルが売りに転じる可能性から相対的な金価格の上昇

T社 2023年中の利下げ示唆で米ドル安による金価格上昇

ホームページもご覧下さい。
<http://www.goldsumitatekun.com>

株式会社ゴールドリンク



東京都千代田区飯田橋2丁目8番5号

多幸ビル九段10階

電話 03(5275)5588

FAX 03(5275)5677

Email: info@goldsumitatekun.com



GOLD FOURSEASONS REPORT

2023年夏号

2010年9月1日創刊 2023年7月25日発行 通巻第50号

●本誌に掲載されている情報は内容が正確であるよう最善を尽くしておりますが、内容についての一切の責任を負うものではありません。●本誌に掲載されている情報に基づいて投資活動を行った結果、損害が発生したとしても、弊社はその責任を負うものではありません。●本誌に掲載されている内容の著作権は、株式会社ゴールドリンクに帰属します。弊社に無断で転用、複製等することは固くお断りします。